

うきはテロワールと悠久の古代史

令和7年3月16日 前うきは市長 高木典雄

福岡市から高速道路を利用して、うきは市にお越しになる皆さんが、朝倉インターを降り、朝倉大橋を渡りうきは市に入ると、空気が違う、何だかほっこりした気持ちになると云われます。景観十年、風景百年、風土千年と言われますが、うきは市には、二千年を超える歴史、風土が息づいています。このことを「うきはテロワールと悠久の古代史」と称して、皆様に紹介させていただきたいと思います。

【注】テロワール

土地のことをフランス語でテール（terre）といい、テールから派生した言葉がテロワール。フランスでは、生育地の土壌、地勢、気候など地理的条件をブランド化につなげていく言葉として使用されています。

1. うきは市の概要

北には九州最大の大河である「筑後川」と、南には屏風山とも呼ばれる「耳納連山」に囲まれ、大分県との県境に位置する福岡県うきは市は、福岡都市圏から車で一時間も満たない近距離にありながら、水と緑に恵まれ、風光明媚な自然環境、田園風景を今なお保っている、人口2万8千人のまちです。

うきは市は海こそありませんが、山麓部、中山間地、平坦地そして扇状地が広がる、大変起伏に富んだ地形を有しています。山麓部や中山間地には果樹園や棚田、平坦地には古い町並みや米、麦、植木等の圃場^{ほじょう}が広がっている他、古墳や神社、仏

閣など歴史・文化遺産の多い地域でもあり、まさに日本の原風景がここにあるとい
っても過言ではありません。

そのことを物語るように、数々の日本百選等の選定を受けています。代表的な
もので ①昭和43年、環境庁指定の国民保養温泉（筑後川温泉・吉井温泉）②昭和
60年、環境庁選定の日本名水百選（清水湧水）③平成3年、NPO 法人健康と温
泉フォーラム認定の名湯百選・温泉療法医がすすめる温泉（筑後川温泉・吉井温泉）
④平成7年、林野庁選定の水源の森百選（滝のある水源の森、藤波ダム・調音の滝・
魚返りの滝・斧淵の滝）⑤平成8年、文化庁選定の重要伝統的建造物群保存地区（筑
後吉井 在郷町）⑥平成11年、農林水産省選定の棚田百選（つづら棚田）⑦平成
18年、農林水産省選定の疎水百選（大石用水）⑧平成20年、公益社団法人国土
緑化推進機構認定の森林セラピー基地（セラピーロード、つづら棚田・長岩の奇岩
群・調音の滝）⑨平成24年、九州風景街道推進会議登録の九州風景街道（みど
りの里・耳納風景街道）⑩平成24年、文化庁選定の重要伝統的建造物群保存地区（新
川田箆 山村集落）⑪平成27年、環境省選定の生物多様性保全上重要な里地里山
（小塩地区 ほたるの里）があり、一つの自治体で十を超える百選の選定等は大変
珍しいのではないかと思います。まさに日本の原風景が残るまち、うきは市であ
ります。

2. 「フルーツ王国」うきは

うきは市は、先ほど述べたように山麓部、中山間地・平坦地そして扇状地が広がる、大変起伏に富んだ地形を有しています。かねてから、このような地形を活かして、農作物の適地適作が行われてきました。そして現在では、農業に従事される皆さんの、^{たゆ}弛まぬ努力により、農業は基幹産業のひとつとなっております。特に、うきは市では、いちごにはじまり、桃やブルーベリー、ぶどう、梨、柿、イチジク、キウイ・・・といった四季折々のフルーツが一年中収穫できます。また、ぶどうは57種類、桃は42種類、梨は20種類、柿は18種類など、それぞれの品種も多く、「フルーツ王国」としてPRに力を入れているところです。

3. うきはテロワール

このように、うきは市は、フルーツをはじめ豊富な農作物が生産されています。何故こんなにも農業生産に適しているのか、平成27年から数年かけて地方創生の取り組みの一環として、うきは市の地勢、地層、地質、気候、風土などの地理的特性に関わる学術的調査を行いました。これまでは、非常に定質的というか、「うきは市は水と緑のまちです。気候も温暖で、美味しいフルーツが採れます。そんなフルーツの里うきは市にお越しになりませんか。」という、情緒的な説明を行ってきました。しかし、これから農業も国際展開を図っていかなければならない中で、このような説明では、なかなか消費者の皆様の納得が得られないのではないかと、もっ

と定量的に、データの、科学的、数值的に、こういう数字が出るからうきは市の農作物はこんなに素晴らしいのだと立証できるように、大学の先生をはじめ専門家の皆さんの参画を得て調査に努めてきたところです。

結果として、想定以上のデータを得ることができました。数多くの項目において、国内の他の農業生産地よりも良いデータを得ることができ、調査に当たって頂いた先生方から、折角の機会だから文献調査になるけど、海外とも比較してみようということになり、その結果うきは市の土地が、フランスのワインの産地、ボルドーやアルザス地方と非常に似ているということが示され、それを受けて「うきはテロワール」と名付けた新しい発想のもとで、うきは市のブランドの構築を図るとともに、「フルーツ王国」としても啓蒙・普及を図っているところです。

ここで、学術的調査の結果をもとにうきは市の大地が、いかに農作物の生産に適した地理的特性を有しているかを、特に代表的なものとして地形、気温、土壌、風、水、雨、地理について、うきは市の恵まれた7大自然要素としてご紹介致します。

(1) 地形（複合扇状地）

うきは市から久留米市にかけて23kmに及ぶ耳納連山が連なっており、耳納連山の山筋、麓にはいくつもの溪流が流れ、それぞれ扇状地を形成してゆるやかな地形が広がっています。この扇状地は溪流と溪流の間隔が短く、山麓部の幾筋もの溪流から何度も繰り返し溜まった土砂が重なり合っており、複合扇状地という珍しい地

形になっています。これは400万年以上かけて作り上げられた複合扇状地で、非常に複雑な地層、地質になっていて、結果としてフルーツを生産するのに適した水はけの良さと保水力を有していることが分かりました。国内には他に富山湾に面したところに10キロ満たない複合扇状地があるとお聞きしていますが、これだけの規模の複合扇状地は他にないとのこと。なお、フランスのボルドーやアルザスにおけるワイナリーの分布は山麓部に集中し、山麓には複合扇状地が発達しており、うきは地域の地形条件と非常によく似ています。

(2) 気温

① 逆転層

例年、10月から11月にかけて放射冷却現象（晴れて風のない夜間に地表から熱が放出されて大気が冷却される。）が現われる時季になると、耳納連山の麓に逆転層といわれる現象がたびたび出現します。

逆転層とは、気象学用語のひとつですが、普通ならば大気は上空に行くに従って、気温が下がっていくのですが、その大気の中に逆に上空に行くほど温度が上がってしまう、そういう層が出来ることを逆転層と呼んでいます。耳納連山の麓一帯が、白くぼうっと掛かる霞の逆転層は、何とも言えない景観を作り出します。

この時季は、フルーツ王国の王様格である、うきは市の代表的なフルーツ

『柿』が実り豊かになってくるときであり、逆転層は、たわわに実りをつけた柿を霜害^{そうがい}の被害から守ってくれます。

② 低温遭遇時間

フルーツは収穫を終えると「休眠」と呼ばれる状態に入ります。休眠したフルーツは、一定期間低温にさらされることで、眠りから覚め発芽の準備を始めます。これを「休眠打破^{きゅうみんだは}」と言います。休眠打破は、秋から冬にかけて一定期間、低温にさらされることが重要なポイントとなります。つまり、寒さにさらされないと、平常な発芽が出来ないことになります。

一定の低温遭遇時間が確保出来ないことにより、発芽不良に陥ってしまうことを「眠り病」と言います。

発芽不良に陥らないためには、7. 2℃以下の低温遭遇時間が、ブドウの場合は600時間、柿・梨の場合は、700時間、桃については1200時間必要とされます。地球温暖化が進む中、とっても大きな問題ではありますが、幸いうきは市においては、約1800時間の低温遭遇時間が確保されています。

③ 日較差

夜に温度が下がると、より多くの糖分を実に送ることができます。つまり朝夕の寒暖差があると、実のしまりと味の深みが増し、とっても甘い果物になると言われています。

うきは市は、気象庁のデータによると年平均気温が約16℃程度で比較的温暖な中、朝夕の寒暖差つまり日較差は、10.9℃と他地域と比較して多くなっております。そのことからフルーツが引き締まり、味に深みが出て、その甘さやみずみずしさは格別なものになっています。

(3) 土壌

耳納連山の麓、山麓部には国内でも珍しい複合扇状地が形成されていることを説明しましたが、平坦地においても、筑後川や周辺の丘陵地から流れる河川の沖積作用により、数々の扇状地が形成されており、長い年月をかけて肥えた土壌に育っています。

扇状地は、水を通しやすい地層となっており、深部の根まで呼吸が容易なため、農作物の育成に大変適しています。

また、先人の偉業や弛まぬ営みにより、広い平野は豊かな水田地帯となっています。

(4) 風

耳納連山の北側に位置するうきは市は、最大風速が小さく風の影響が少ない日本有数の微風地帯です。

特に、午前中は微風が顕著なため、かねてからパラグライダーをはじめとするスカイスポーツが盛んに行われています。耳納連山から飛び立ち、筑後川の河川

敷に降りる光景をご覧になられた方も多いのではないかと思います。スカイスポーツは微風地帯であることが必須条件となっていますが、九州においては、うきは市の他は宮崎県都城市にあります^{かねみたけ}金御岳（金御岳から飛び立ち大淀川の河川敷に降りる）の二か所のみが、数少ない適地だと伺っています。

気象庁のデータによると、うきは市の平均風速が平年値で1.0 m/s と他地域より大変小さくなっています。微風であることはフルーツを育てるうえで、過度な蒸散を防ぎ光合成を促進することで、果実の肥大成長につながります。さらに、風が強いとフルーツの樹木の枝が果実に当たり傷つけることになってしまいますが、その心配も少なくなります。

また、耳納連山に守られ、台風被害が周辺地域よりも少ないことも立証されており、フルーツ生産に適しているところです。

(5) 水

① 地下水（うきはの恵水〈めぐみ〉）

うきは市は、上水道が整備されておらず、地下水だけで生活用水等がまかなわれている、全国でも非常に珍しい「水のまち」です。

耳納連山と阿蘇山を水源とする筑後川水系から滲み出る豊富で良質な地下水は、古くからうきは市の暮らしを支え、「うきはの恵水^{めぐみ}」として様々な形で私たちに恩恵を与えてきました。

うきは市の平坦地の地下に溜まっている水の総量は約7.4億 m^3 、なんとうきは市民の皆さんの生活用水や農業・事業のために利用している年間使用量の120年分にあたります。

この豊かな地下水は、農産物を育てるために欠かせない、とっても大切な要素のひとつとなっています。一方、稲作により田には河川から大量の水が引かれます。雨が降ったときだけではなく常に水を張っている田は、地下に絶えず水を送る大切な働きをしています。

② 健康で美味しい水

うきは市の豊かな地下水や湧水は、全国の多くの日本名水百選と同様のアルカリ土類炭酸塩です。塩はナトリウムという陽イオンとクロールという陰イオンの二つで成立っています。これが水に溶けて離れることで電解質となります。人間の体は、この電解質の陽イオンと陰イオンのバランスによって、血管・細胞・神経・筋肉などの動きを調整しますが、アルカリ土類炭酸塩は非常にイオンバランスのとれた、良質な地下水となっています。

また、うきは市の地下水は地下に留まっている時間、滞留時間が長く、平坦地では20～40年、中山間地では50～63年、日本名水百選に選定されている清水湧水は47年となっています。地下水の味の決め手は、シリカやカルシウム・カリウムですが、滞留時間が長くなるとシリカが多くなるので、美味しい水

となっています。

なお、吉井地区の水源は耳納連山ですが、複合扇状地であることから複雑な帯水層となっており、水源との距離は短い中、ゆっくりゆっくり土砂の隙間を30年から40年かけて流れ、その間沢山のシリカ・カルシウム・カリウムを含むことになります。吉井の語源の一つに、「よ《吉》い水が湧き出る《井》戸」という説があるほど、特に美味しい水となっています。

このように、うきは市の地下水は健康な水と美味しい水の要件を満たす軟水であり、おいしい農産物を育てるために欠かせないとても大切な要素を有しています。

(6) 雨

うきは市は、太平洋岸気候区に属しており、年平均降水量は2006mmと福岡県内では一番多く、気候条件に恵まれた環境となっています。

気象庁のデータによると、8月の午後に5mm/h以上の雨が降った日数、つまり夕立が近隣や全国の果樹名産地（ブドウ生産が盛んな山梨県内、柿生産が盛んな和歌山県内など）と比較して多いものになっています。

適度な夕立があることから、果樹の水分補給と暑さの調整が可能となっています。また、渇水期の干ばつ防止にもつながっており、農産物の生産に大変適しています。

(7) 地理

うきは市は筑後川が筑紫平野に流れ込む玄関口であり、平坦地については阿蘇山の噴火や氾濫原によって形成され、粗い目、細かい目の地層が重なり、水はけの良い土地となっています。

30万年前～9万年前に4回の阿蘇山巨大カルデラ噴火が起きました。うきは市の平坦地の地層の中にも3回目と4回目の噴火で降り注いだ火山灰が認められます。

また、筑後川は名だたる暴れ川であり、氾濫のたびに河道を変え、筑後川本流の周辺は氾濫原となっていました。川の氾濫は土地に豊富な栄養を与えるため、豊かな土壌となって米や麦・野菜等の生育に適した農地となっています。

これまで、学術的調査の結果うきは市の大地が、いかに農作物の生産に適した地理的特性を有しているかを、代表的事例として7大自然要素の概要を述べてまいりましたが、如何だったでしょうか。他地域との比較で具体の数値はお示ししませんでした。数多くの項目において、国内の他の農業生産地よりも良いデータが出ており、うきは市は他の地域にはない優位性を持った地域であると言えます。

4. 悠久の古代史 ～悠久の古から続く「うきは」での人々の営み～

うきは市は、うきはテロワールで分かるように、大変起伏に富んだ地形であり、豊かな自然に恵まれ、様々な地理的環境を有しております。肥沃な土地ゆえに人々が集まった「うきは」には、太古より多くの民が生活し、生業としての農業があったことが窺えます。

また、「うきは」は、博多湾から朝倉を通り大分に抜ける街道、有明海からそして博多湾から筑後川を上り日田に至る航路の交わる位置にあり、博多・大宰府の奥の院に位置しています。さらに八女・菊池からうきは・日田を通り響灘・瀬戸内海に抜ける街道、航路など、地勢上重要な場所にある「うきは」には、たくさんの歴史的な史跡が残っており、そこには太古から栄え続けて来た理由があるのではないかと考えました。そこで、「うきは」の歴史を改めて調査・整理したところ、権力者の地、交通の要所、農業の盛んな地として栄え、太古より多くの民が暮らし続けてきたことが分かってきました。その概要について皆さんにご紹介させていただきます。

(1) 古代の「うきは」

旧石器時代の遺構としては、浮羽町の新川遺跡で集中して確認されており、筑後川流域では唯一の遺跡となっています。また、吉井町の古畑、若宮、宮田、浮羽町の大野原、山北の扇状地及び巨瀬川沿いの浮羽町の尼ヶ瀬開拓地などから

は、縄文時代の遺物が数多く見つかっており、早期に属する曾畑式土器^{そばた}も出土しています。近年では、平坦地において縄文時代の遺跡が多く確認されるようになっており、特に、浮羽町の柳瀬遺跡では、孔列文土器が出土して朝鮮半島とのつながりを示すものとして非常に注目されているところです。このころから「うきは」は、人々の居住に適していた土地だったと考えられます。

弥生時代には、稲作文化が中国大陸から伝わり、人々は生活共同体を作って生産にあたるようになります。集落をまとめていく中心の人物も出てくるようになり、集団は次第に拡大されて小国家的存在となり、更に小国家間では争い、奪い合いが繰り返されるようになります。浮羽町の日永遺跡^{ひなが}においては、銅戈^{どうか}と銅矛^{どうほこ}と一緒に出土した全国的に見ても貴重な青銅器埋納遺構が検出されており、弥生時代においても重要な土地であったことが窺えます。中山間地では、浮羽町の妹川谷等の縄文、弥生時代の遺跡から、雨水を堤に蓄えることにより、陸稻^{りくとう}や水稻^{すいとう}、その他の穀物の栽培が行われてきたことを知ることができます。また、巨瀬川、隈上川が作る三角州の台地の近傍^{きんぼう}にも堤が見られ、堤は古代より人々の生活の一部として水田耕作に利用されたものと考えられます。

古墳時代になると、地方を治める権力者やその一族などの支配者的豪族と一般の人々の間に身分上の階級が生じてきます。「うきは」では数千に及ぶ古墳が作られていたそうですが、残念ながら現在では殆どが壊されているものの、百基以上

は現存しています。その中には国が指定している全国の装飾古墳の実に一割にあたる7基が保存され、なかでも近畿地方とのつながりを強く窺わせる副葬品が出土した、吉井町の月岡古墳をはじめとする若宮古墳群や壁画に中国の思想が示されている装飾のある、吉井町の屋形古墳群などがあり、これらから「うきは」に住む人々が他の場所の人々と交流し、異なる文化や思想を取り入れ、その地独自に深めていったものと考えられます。数々の装飾古墳の存在は、「うきは」が古代における歴史の舞台であり、遺跡の宝庫でもあったことを如実に示しています。

(2) 古文書からみる「うきは」

「うきは」の地は最も古くから文献（古事記、日本書紀、風土記等）に度々登場し、その場所が特定できる特異な地であります。^{いくはむら}的 邑、^{いくは}以久波、^{うきは}宇枳波、^{いくは}生葉、^{うきは}浮羽と色々な漢字で出てくるのが全て「うきは」の地です。日本書紀には、第12代^{けいこう}景行天皇の九州大遠行の終着点となる「浮羽島」が記されています。景行天皇が「うきは」の地にはじめて足跡を残し、「生葉の^{あんぐう}行宮」を置いたことの意味は極めて重要であります。また、日本書紀には、「うきは」を拠点とする^{いくはし}的 氏と、第16代仁徳天皇をはじめ朝廷とのつながりが記されているところです。

第37代齐明天皇は百済支援に応じ、王族や豪族を率い、^{あさくら}朝倉 ^{たちばなのひろにわのみや}橘 広庭宮に^{うつ}遷られ、百済復興の戦に備えました。吉井町の^{たちばんだ}橘 田にある竈門神社の縁起書によると、天智天皇が朝倉の木の丸殿から見渡した時、「橘の広庭」と言ったことによ

り、「橘田」の地名が起きたといわれています。筑後川の中流域に位置する「うきは」は、博多湾や有明海に通じる場所で、両海域から敵に攻め込まれても、陸路で豊前を経て、瀬戸内海を通して大和へ逃走することができます。「筑後国風土記」の逸文に、倭軍に攻められた磐井が豊前に逃げたというくだりがあり、磐井の乱の鎮圧軍は、博多湾から筑後へと迫ったことから、磐井は筑後川付近を上って、豊前へ向かおうとしていたものと思われます。このことから「うきは」の地が地勢的にも重要な交通の要所であったことが窺えます。

全国的にひかれた条里制の地割を主に耳納山麓一帯に確認することができ、農民に対し租庸調等の賦課制度を導入する基礎作りを行う様子が想像できます。

679年筑紫大地震の痕跡にも、市内発掘調査において地割や砂脈などが確認されたところです。大化の改新から始まった律令国家の土地国有制の中にできた私有地を指す荘園は、うきは市内でも確認され、地震で被害を被ったにも関わらず、人々はこの地に住み続けたことが推測されます。また、平城宮出土の木簡に、生葉郡煮塩年魚伍斗を貢納したと記載されています。この地の人々が朝廷などと交流していたことは明らかなところです。

743年墾田永年私財法が出され、新しく開墾した田はすべてに永久にその私有が認められました。人々は開墾をし、新たな場所を創り上げていきます。吉井町^{ふくだみ}福富校区の「福富」^{ふくだみ}の名前は、開墾地を「福富荘」と呼んでいたことに由来す

るという考えもあり、人々がこの地で作物を収穫し、富を得ていたことを窺い知ることが出来ます。

平安時代中期に作成された「倭名類聚抄」には生葉郡の郷名として、椿子・
小家・大石・山北・姫沼（治）・物部・高西の七郷の記載があり、早くから広範囲
に開墾されていたことを意味します。このことからこの地区には多くの農民が
おり、作物を栽培していたことを示しています。

(3) 中世、近世へ 時代と共に変化する「うきは」

中世に入ると、「うきは」では南朝方である星野氏と、北朝方である間注所氏の
二人の豪族による支配が主なものとなり、41か所もあったともいわれる山城や
出城が中世後半に築かれたと考えられます。平常時は農作業を行い、攻防戦が始
まると山城等に籠り戦うという形態であったものと思われます。見晴らしの良い
耳納連山の山間に多くの山城・出城が築かれ、その麓や平野部には居館や平城が
築城されていきます。吉井町の屋部には「血留池」という名称の池があり、伝に
よると、中世の争いの時に多くの人が切りつけ合い、上流から血が川伝いに流れ
ついたところが血留池だといいます。このことから、多くの人が争いにより亡く
なったこと、またその当時より以前から先程述べましたように人工的に堤、つま
り溜池をつくっていたことが窺えます。人々は山の水を溜池により貯水し、田畑
に利用していたのだらうと思われます。現在ではうきは市内に141か所の溜池

を確認することができます。

江戸時代になると、藩政の元に農地の拡大や街道の発展が図られ、吉井の町並みができるなど、現在のうきは市の景観の原型が形成されたと考えられます。特に江戸初期に開削された、大石長野用水や袋野用水は、地域の発展に大きく貢献し、肥沃な一大穀倉地帯に生まれ変わり、商品作物の栽培加工が盛んになっていきます。蠟燭・酒・麵・精油などの製造で財を成した、「吉井銀^{よしいがね}」と呼ばれる豪商たちも輩出されます。

また、筑後国の生葉郡、竹野郡、山本郡は「筑後国上三郡」と呼ばれており、明治・大正時代には「上郡米」の名称で、吉井町の高橋を流れる巨瀬川で舟積みされ筑後川を経て、大川の若津港から、長崎、大阪、東京などに出荷されていました。まさに、ブランド米、産地のブランド名のはしりだったのではないかと思います。

(4) うきは市の人口変遷

うきは市は、平成17年3月に旧浮羽町、旧吉井町が合併して誕生しました。合併時34,101人いた人口も、令和6年4月1日現在、27,638人に減少しています。

ここで、合併以前のこれまでの人口規模について、推計も含めながら日本の全体人口と対比しながら見ていきたいと思います。現在のうきは市域において人口が一番多かったのは、昭和25年の43,085人で、日本の全体人口が8,3

20万人ですから、うきは市域の比率が約0.05%となります。市制・町村制が施行された明治22年のうきは市域の人口は、27,156人で、日本の全体人口が、3,900万人ですから、うきは市域の比率が約0.06%となります。江戸中期のうきは市域の人口は、17,000人で、日本の全体人口が、3,000万人ですから、うきは市域の比率が約0.06%となります。奈良時代のうきは市域の人口は、9,600人で、日本の全体人口が600万人ですから、うきは市域の比率が、約0.16%となります。

	昭和25年	明治22年	江戸中期	奈良時代
うきはの人口 (人)	43,085	27,156	17,000	9,600
日本の人口 (人)	83,200,000	39,000,000	30,000,000	6,000,000
うきはの人口比率 (%)	0.05	0.06	0.06	0.16

こうしてみると、時代を遡ればのぼるほど「うきは」の人口比率が高くなっていることが分かります。特に古代の奈良時代においては、日本全体の約0.16%もの民がいたことになります。令和6年4月1日現在の日本の全体人口が概算値で1億2,400万人ですから、うきは市の人口27,638人の比率は、約0.02%となり、なんと約8倍にもなります。

このことから「うきは」には、古くからたくさんの人々が住んでいたことが分かると思います。

以上のことから、「うきは」の数々の歴史遺産は、多くの民がいた証であり、
「うきは」の民を支えた肥沃な大地があるからであります。
うきは市は、豊かな地理的環境に恵まれ、人々の営みが古来より現代まで絶える
ことなく続き、農村社会が形成され、歴史と文化をつくってきた理想郷であると
いえます。

イギリスの歴史家 E・H・カーは、「歴史とは何か」の中で、「歴史は、現在と過
去の対話である。（中略）過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本
当に掴めない。」と言っています。地方創生が求められる中、地域の歴史・文化を紐
解くことが、今こそ求められているのではないのでしょうか。

5. まとめ

「うきはテロワールと悠久の古代史」と称して、皆様にご紹介させていただきました
ました。今後のまちづくりを進めるにあたっては、これまで気づかなかったうき
は市の素晴らしさを実感し、新しい価値観を持って、日々の生活を送ることがで
きる社会を形成することが重要だと考えます。

かつての日本の原風景が残る、うきは市の新しい価値観は、うきは市の日常の
中に存在していると思います。恵まれた自然環境を舞台に縄文、弥生、古墳時代
から古代文化が開花し、農村社会が形成され、良質な土壌や地勢・気候等に育ま

れ、人々が生活し、そして現在に至ったうきは市は、他の地域にはない優位性を
持った地域であるといえます。知恵と工夫を凝らして、これからも、他の地域と
は一味も二味も違う存在感のある、「うきはブランド」を構築して欲しいと思いま
す。

うきは市は、地域の自然や歴史、文化を大切にして、「ゆっくり・ゆったり・ゆ
たかに」潤いのあるまちづくりを進めています。

皆さん、そんなうきは市にこれからも応援をよろしくお願い致します。